

－帰化植物雑考－

タカサゴユリかシンテッポウユリか？

－帰化植物メーリングリストより抜粋－

編集部

はじめに

夏の7～8月頃に高速道路の両側が法面になっている場所を走ると、法面一面にタカサゴユリが白い花を咲かせているのをよく見かける。こうした光景は中央自動車道、関越・東北自動車道などの関東から、関西、西瀬戸自動車道、山陽自動車道など各地で見られ、場所によっては、数kmから10数kmまで及ぶこともあり、特に最近では急激に広がっているという報告が各地から寄せられている。

タカサゴユリ *Lilium formosanum* Wall. は、台湾の原産でわが国には1924年に花卉として導入され、庭園や切り花用に栽培されてきたが、種子の発芽から6ヶ月ぐらいで花が咲くため、最近では各地に野生化して道端や堤防法面などで繁殖して帰化植物雑草となっている。地下に百合根状の鱗茎があって、そこから高さ1.5m前後の茎が直立し、線形の細い葉を密につけ、夏から秋にかけて茎先に長さ15cm、直径13cmほどのラッパ状の花を総状につける。花の内部は乳白色、外側は紫褐色を帯びる。（日本帰化植物写真図鑑・全農教より）。これがタカサゴユリの解説であるが、最近タカサゴユリと思われる野生のユリで花の外側がテッポウユリのように白色のものが多く見られるようになり、これをシンテッポウユリと呼ぶ人と、いやこれもタカサゴユリの変種だという人もいてかなり混乱している。

しかも学名が *Lilium formosanum* Wall. と同

じで、「日本帰化植物写真図鑑・全国農村教育協会」と「日本の帰化植物・平凡社」では和名をタカサゴユリとしており、「神奈川県植物誌1988・2001」と「千葉県の自然誌」ではシンテッポウユリと記載されているので混乱に拍車をかけている。

この問題について、帰化植物メーリングリストで昨年多くの人から意見を寄せられたので、全農教・日本帰化植物友の会通信2005年10月23日発行で「タカサゴユリかシンテッポウユリか？」と題して抜粋掲載したが、こうした問題は多くの帰化植物にも共通点があるので「植調」に転載した。

■タカサゴユリかシンテッポウユリか？

●タカサゴユリについて

先週中央自動車道を走ったらタカサゴユリが見事に咲いていました。4年前ぐらいまでは中央自動車道の双葉サービスエリアの法面にポツリポツリ、と咲いていた程度だったが、今回走ったらこの双葉サービスエリアから韭崎インターまでの数kmにわたって道路両側の法面に見事にタカサゴユリが花を咲かせていました。タカサゴユリの種は軽くて風で広がると思っていたが、わずか3～4年でこれ程広がるとは今更その繁殖力に驚きました。

東京・廣田伸七（2005.8月26日）

●タカサゴユリについて

私も2, 3年前から気にかかっておりました。最初みつけたのは琵琶湖の西側の湖周道路でした（比較的新しい道です）。昨日は大阪から中国道を経て播但連絡道で和田山まで行きましたが、あちこちで群生していました。

やはり成長（開花期まで）の早さが原因なんでしょうか？

京都・速水 厚（2005. 8月26日）

●タカサゴユリについて

私が知人からタカサゴユリを教えてもらったのは今から10年近く前のことでした。場所は県の南部でまだ数はそれほど多くなかったように記憶しています。この数年の間に分布域が急速に広がったようで、山裾にある私の職場の周りでも法面のあちこちで開花しています。

また、今週のはじめに西瀬戸自動車道、山陽自動車道を通り下関まで走りましたが、タカサゴユリばかりが目につきました。タカサゴユリがみられないのは高架の上とトンネルの中だけといってもよいくらいでした。

愛媛・小林真吾（2005. 8月26日）

●シンテッポウユリ

タカサゴユリが話題になっていましたので、便乗させて下さい。石川県でも十数年前から殖えだして、特に最近は急激に増加しています。日本帰化植物写真図鑑（全国農村教育協会）には、タカサゴユリしか載っていないのですが、今年になって急に、タカサゴユリの特徴である花被外面の「紫褐色」のぼかしが見られない純白のタカサゴユリが増えてきております。

「日本の帰化植物」（平凡社）によると、テッポウユリとタカサゴユリとの間に雑種ができ、

「シンテッポウユリ」（新鉄砲百合）と呼ばれるそうです。タカサゴユリによく似ているが、花は白色だとのことです。

石川・本多郁夫（2005. 8月26日）

●タカサゴユリとシンテッポウユリ

タカサゴユリとシンテッポウユリの話について、興味深く拝見しています。

本多さんが述べられていたとおり、「日本の帰化植物」（平凡社）には、「シンテッポウユリはタカサゴユリによく似ているが、花は普通白色である。」という記載があり、「タカサゴユリによく似て、花被片の外側が赤紫色を帯びないもの」がシンテッポウユリとなるような印象を受けるのですが、この点については、前から少し違和感がありました。じつは園芸学でいう「シンテッポウユリ」とは、これとは少し違うもののように感じるのです。たとえば、「園芸植物大事典」（小学館）では、シンテッポウユリを「交雑種で、テッポウユリとタカサゴユリの交配によって生じた。テッポウユリが持つ純白の花色、大型の花形、広葉の形質と、実生後1年以内に開花するタカサゴユリの性質をあわせもつ」としており、単なる自花のタカサゴユリとは異なるようです。

もう少し調べてみると、シンテッポウユリは、純白色のタカサゴユリとテッポウユリの種間雑種を育成し、これにテッポウユリを交配して育成したものが最初で、その後育成された新品種は、両種の種間雑種にテッポウユリをくりかえし戻し交雑することにより、播種から1年以内の開花性を残しつつ、テッポウユリの草姿、花容、品質などの特性を強化した育種が行われて生まれたもののようです（「花専科 育種と栽培 ユリ」（誠文堂新光社）による）。

とすると、一般に園芸品種として流通している「シンテッポウユリ」とは、花色だけでなく、幅広の葉の形なども含め、かなりテッポウユリに近い形質を備えたものと言えそうで、こう考えると、植物学でいうシンテッポウユリと、園芸学でいう「シンテッポウユリ」はもとは同じであっても、さまざまな園芸品種が生まれた結果、かなり違ったものをさしているように思えてなりません。帰化の状況について考えるに当たっても、このことに留意する必要があるようです。

神奈川・宮本 亮 (2005.8月27日)

●タカサゴユリとシンテッポウユリ

私も宮本様のご意見に賛成です。今がちょうどタカサゴユリの開花時期のようで大きな道路沿いの土手や草むらでたくさん咲いていますね。現在の園芸業界で作られている「シンテッポウユリ」は戻し交配などで明らかにテッポウユリそっくりなものになっているものだと思います。もともとの「シンテッポウユリ」なるものはよくわかりませんが、売られている「シンテッポウユリの種」をまいて育てたことはありますが、石垣島などで自生しているシンテッポウユリとは葉の広さも厚みも茎の様子も印象は異なるものの、今愛知県周辺で開花しているタカサゴユリ（と思ってみているもの）とは全く違ってみえます。野生化しているものの中には明らかにシンテッポウユリらしい個体があるのかもしれませんが、花の色の違いだけなら個体変異の範囲なのではないでしょうか。

愛知・吉田洋行 (2005.8月28日)

●タカサゴユリとシンテッポウユリ

タカサゴユリとシンテッポウユリですが、こ

のところML上で話題になっていますが、私もずっと気になっているものです。

現在、少なくとも南関東～東海地方で野生化しているものを、シンテッポウユリとタカサゴユリに区別することはできません。同じ、一連のものと思っています。

神奈川では最初（1980年頃）はタカサゴユリとしていましたが、「神奈川県植物誌1988」でシンテッポウユリとし、「神奈川県植物誌2001」でもシンテッポウユリとしてきました。

シンテッポウユリは宮本さんの書き込みにあるように、テッポウユリ *Lilum longiform Thunb.* とタカサゴユリ *L. formosanum Wail.* の交雑により作り出された園芸種の総称です。テッポウユリは黒島・屋久島以南の南西諸島と台湾の東岸の緑島（旧 火烧島）に自生するといわれますが、種子島、屋久島、小笠原などでは栽培していたものが逃げ出していると聞きます。また、タカサゴユリは台湾の平地から3000m位の高山にまで分布しているもので、日本には1924年（大正12年）に種子が導入され、切花用にさかんに栽培されたといえます。テッポウユリが春に開花するのに対し、タカサゴユリは日本では7～8月に開花するので、テッポウユリのない夏の切花として人気があったようです。実生が10ヶ月足らずで開花し、夏に開花するタカサゴユリの性質と、純白で大輪のテッポウユリの性質をあわせもったものを作出する目的で両者の交配が試みられ、長野県の西村進氏が1939年頃に成功したそうです。その後、テッポウユリのさまざまな品種とタカサゴユリとの交配、交配種とタカサゴユリやテッポウユリとのもどし交雑などが繰り返され、たくさんの園芸品種が作出されました。これらの交配種を総称してシンテッポウユリといえます。実生から短期間に開

花することと夏に開花するというタカサゴユリの性質以外は、テッポウユリに近いものの方が園芸的には価値があるようなので、市場に出回っているシンテッポウユリは草姿や花の様子がテッポウユリに近いのではないかと思います。しかし、シンテッポウユリは自家交配が可能だということなので、庭で栽培したり、放置されたりしているうちに、タカサゴユリに近い草姿や花のものも出てくると思います。一方、タカサゴユリの切花としての栽培は、シンテッポウユリが普及する（1970年代頃？）につれて廃れたといえます。

さて、それでは現在、野生化しているものが

タカサゴユリそのものなのか、シンテッポウユリなのかは、私にもよくわかりません。私の勤めている神奈川県立生命の星・地球博物館には1942年に栽培されていたタカサゴユリの標本（まだ、シンテッポウユリが普及していない頃のもので、たぶん、純粋なタカサゴユリと思います）が何点かありますが、現在野生化しているものと比べ、少し葉が細いかなという程度で、明らかな違いは見出せません。また、ユリの育種家で知られる清水基夫氏の残された標本にシンテッポウユリのいくつかの品種の標本がありましたが、多くは葉がやや幅広いものです。しかし、中には「伊那新テッポウユリ」と



▲タカサゴユリ・シンテッポウユリ
花の外側が紫褐色を帯びているもの

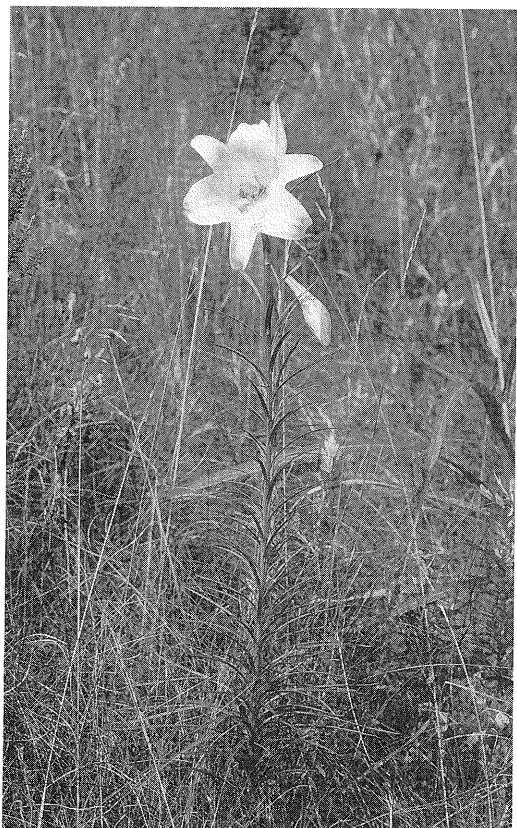


▲タカサゴユリ・シンテッポウユリ
花の外側が白色のもの

いう、現在野生化しているものとほとんど同じ位の葉の幅のものもありました。もはや日本ではタカサゴユリとシンテッポウユリ起源のものとは簡単には区別ができないかもしれません。

神奈川では1980年頃からタカサゴユリまたはシンテッポウユリが増え始めています。1979年に採集された標本に、大井埠頭に100株以上が群生などの記述がありました。現在はその頃よりも明らかに増加しています。花がきれいなので、草刈では目こぼしされること、場合によっては大事にされるため、どんどん増えているようです。

神奈川・勝山輝男（2005.8月29日）



▲タカサゴユリ・シンテッポウユリ
葉が細く花の外側は白色
園芸品種のシンテッポウユリの野生化したものか？

●シンテッポウユリ

皆様のご意見をお聞きして、タカサゴユリとシンテッポウユリとは益々区別が難しいものであると認識しました。おそらく、染色体の比較、あるいはDNAの検討をしなくてはならないのでしょう。そうすると私のようなアマチュアには手の届かない世界となってしまいます。

しかし、園芸の世界での「シンテッポウユリ」はタカサゴユリと似ているよりは、テッポウユリと非常によく似ています。シンタカサゴユリといわずに、シンテッポウユリといったことから領けます。

テッポウユリとタカサゴユリとの雑種にさらに戻し交配や、自家受精などを通して、多数の園芸品種が作出され、園芸品種の「シンテッポウユリ」は、単純な「テッポウユリとタカサゴユリとの雑種」ではすまされないものとなっていることがよく分かりました。

金沢市農業センターで、ここで作出し品種登録された「21金沢白」というシンテッポウユリを見せて頂きました。テッポウユリとよく似ていました。農場では、そのシンテッポウユリを自家受精させたものを栽培している畑もありました。いろんな変わり者がでていました。中にはタカサゴユリに似た葉の細いものもありました。種子から育てると、形質が安定しないので、もっぱら、「鱗片」栽培で育てているということでした。

石川・本多郁夫（2005.8月29日）

●タカサゴユリ（シンテッポウユリ）について
タカサゴユリ（シンテッポウユリ）について、みなさんから寄せられた各地の分布状況をうかがい、私が持っていた印象よりもその実態はさまざまであるように感じています。

私が植物の写真撮影をはじめた15年ほど前、当時、私が住んでいた小平市（東京都多摩地方東部）ではすでに、公園や空き地にタカサゴユリがけっこうありました。当時撮影した写真を見ると、このあたりのものの花被片は、紫色を帯びたものばかりでした。

現在住んでいる鎌倉市周辺でもタカサゴユリは普通にあり、たとえば東海道線の線路の敷地内の草地では群生も見られ、これらの花被片は、いずれも紫色を帯びています。

この話題のこともあって、先週末はタカサゴユリに気をつけていたのですが、たまたまでかけた舞岡公園（横浜市戸塚区）で咲いていたものは、花被片が真っ白なものばかりでした。

神奈川・宮本 亮（2005.8月30日）

●タカサゴユリ

タカサゴユリについて、北のほうの話題が少なかったので、小さな話題をつけくわえさせていただきます。

5,6年前になりますが、福島県いわき市に当時あった実家の庭に、同じ町内の方が「きれいなユリ」を植えて帰られました。翌年には庭中あちこちから出て開花し、2,3年後にはお隣の庭にも。紫色を帯びたほうのタカサゴユリでした。

東京・羽田節子（2005.8月30日）

●タカサゴユリ

いわき市は近いので、水石山や赤井岳にはよく出かけます。こちら日立市でも数年前からあちこちにタカサゴユリが増えてきており今の時期どこに行っても見かけます。シンテッポウユリなどは知らずみなタカサゴユリと思っておりましたが、昨日、観察した所、花被外面に「紫

褐色のぼかしのあるもの、無いものどちらもありました。素人では同定は難しそうなので、どう呼んだらよいか戸惑っております。

茨城・後藤伸介（2005.8月30日）

●シンテッポウユリ

わたしがタカサゴユリを初めて見たのは、30年以上前で、藤沢市の造成住宅地の庭（花壇などではなく）の1本で、その翌年には隣の我が家をはじめあたり中の家の周りに広がっていました。それから数年は全然名前がわからなくていらいらしていたものです。その後も分布状況をチェックしていますが、近年は花被片外側の紫褐色が薄いもの～白一色のものが各地でどんどん増えているような気がしていました。

そこへ、今回のみなさまのシンテッポウユリ／タカサゴユリ情報が得られて納得しました。ネット検索によっても、名前はともかく、いろんな中間段階のものが野生化しているようです。あるいは野生化して種子繁殖することにより、雑種の両親の中間形質を持った個体が出現しているのかもしれませんが。

今後、タカサゴユリ類を見たら、「花被片外側の紫褐色」とともに、葉の広さ／数、草丈、葯／花粉の色（テッポウユリは黄色／タカサゴユリは赤褐色）にも注意して記録しようと思っております。

神奈川・松井宏明（2005.8月31日）

●シンテッポウユリ

金沢農業センターでお聞きしたことの中で、「シンテッポウユリ（園芸品種）の多くは、花が上を向いています。」というのがあります。

私が見ている花被の白い、あるいは赤褐色のぼかしのあるタカサゴユリは花が横またはうつ

むき加減です。野生のテッポウユリも花は横またはうつむき加減です。切り花の束にしたとき、うつむき加減の大きな花では束を作りにくいので、花が上を向いていた（園芸品種のシンテッポウユリ）のではないかと考えますが、実際に花束をご覧になった方はいらっしゃいますでしょうか。

石川・本多郁夫（2005.8月31日）

●シンテッポウユリ

本多さんが「シンテッポウユリ（園芸品種）の多くは、花が上を向いています。」というのがありますが、私は上を向いて咲いているユリはスカシユリしか見た記憶がありません。

今野外にあるシンテッポウユリの類では、初めの小さい蕾の時は真上を向き、それからやや蕾が大きくなる頃はかなり下を向いていて、また反対に首を持ち上げながら横向きになって咲

くように見えていました。

栽培商品のシンテッポウユリは確かに上向きに咲くみたいですね。開花しても上向きのままなののでしょうか？ 咲いてしまっても上向きの白い百合はあまり魅力的に感じませんが…。

東京・歌川道子（2005.8月31日）

●シンテッポウユリ

シンテッポウユリの園芸品種に、花が上向きのものが多い理由については、本多さんのおっしゃるとおりだと思います。

やや古くなりますが、先日のメールでも引用した「花専科 育種と栽培 ユリ」（国重正明編著、誠文堂新光社、1993）によると、ユリ一般の育種目標については、“上向き咲きの特性はユリの重要な育種目標となっている。その理由は、上向き咲き品種は草姿が立性のため、栽培密度を高くできること、切り花包装の作業性



▲スカシユリ

ユリの仲間では花が上を向いて咲く



▲園芸品種のシンテッポウユリ的一种

花が横向き

がよいこと、観賞価値が高いことなど優れた点を持つことが上げられる。”とあります。また、シンテッポウユリの新品種育成の傾向として、“現在、形態的に上向き咲きが育成され、従来のやや斜め下向きや横向き咲きに対して、観賞上、好都合で明らかに消費トレンドに合致している。”との記述があります。また、私の個人的な印象ですが、花束やフラワーアレンジメントなどで用いられている切り花用のシンテッポウユリについては、上向きのものが多かったように感じます。

神奈川・宮本 亮 (2005.8月31日)

●シンテッポウユリのすすめ

「神奈川県植物誌 2001」でユリ科を執筆した一人です。この植物誌では、このごろ話題の「本土に帰化しているテッポウユリ類」を呼ぶのに、タカサゴユリではなく、シンテッポウユリという和名を使いました。このような文献は少数派ですが、今でもその方がいいのではないかと考えているので、その理由をお話したいと思います。

まずは、これまでの登場人物を整理します。自生の植物としては次の2者があります。

- (1) 台湾に自生するタカサゴユリ。ふつうは花被の中間が紫を帯びる。夏咲き。細葉。
- (2) 南西諸島に自生するテッポウユリ。白花。春～初夏咲き。広葉。

そして、

- (3) 園芸植物のタカサゴユリ。日本には1924年(大正12年)以降、種子が導入され、切花用にさかんに栽培されたが、シンテッポウユリ(4)が普及するにつれて廃れた(勝山さん 8月29日)らしい。
- (4) 園芸植物のシンテッポウユリ。テッポウユ

リとタカサゴユリとの雑種(1939年ころ)やさらに戻し交配や、自家受精などを通して作られた多数の園芸品種。(「花専科、育種と栽培ユリ」誠文堂新光社、など)

これら(3)、(4)の2者が現在「本土に帰化しているテッポウユリ類」のもとになったかもしれないものですね。

(1)から(4)の実態と和名の対応関係にはまったく混乱も意見の違いもないですね。

そして、この帰化植物は、シンテッポウユリ(「神奈川県植物誌 2001」「千葉県の自然誌 2003」)と呼ばれたり、タカサゴユリ(「帰化植物写真図鑑」「日本の帰化植物」、その他たくさん)と呼ばれています。

この帰化植物がタカサゴユリと呼ばれるときには、2つのケースがあると思います。

ひとつは、帰化しているのは(3)の末裔であると考えている場合で、もうひとつは、帰化しているのは(4)やその遺伝的影響を受けた末裔だと考えている場合です。

もしも、(3)が野生化したものを「タカサゴユリ」と呼ぶのでしたら大賛成なのですが、人工物である(4)を(1)と同じ名前で呼ぶのには違和感を覚えます。

私は、次のようなことから、この帰化植物が(3)が野生化したものだと考えにくいと思います。

(3)が持ち込まれたのは1924年で、この帰化植物が増えてきたのは1970年代です。近年になって増えたのは、野生化できるような系統が作られたからではないかと思います。(3)がそのままで野生化できる性質を持っているのだったら、もっと早くに広がっていいと思います。

また、(1)は「中国植物誌」では、茎の高さが20～55cmとなっています。この帰化植物の方

は、(2)のようにもっと大きいものもあります。花被片の中肋が紫を帯びる度合、葉の幅も変化が大きいと思います。このことから問題の帰化植物は純粋なタカサゴユリ(1,3)とは違うと思います。

(3)は切花として売られていたそうですが本多さんのホームページにあったように、切花からは稔性のある種子ができるとは考えにくいとも思います。

帰化植物が花被片中肋の紫斑が濃いものから薄いものまで混成集団をつくるというのも、雑種由来であることを示していると思います。

それで、この帰化植物は純粋なタカサゴユリ(3)ではないと考えた方が自然だと思います。

売られているシンテッポウユリ(4)と、問題の帰化植物はまったく違って見えるという投稿もありました。タカサゴユリではないとしても、シンテッポウユリとも言い難いと思われるかもしれません。しかし、(4)は多様な品種があり、通常の野生植物の種がもつよりはるかに大きな種内変異をもっているはずです。(1)に良く似たものから、(2)にそっくりな個体まで連続的にありそうだと思います。その中には自生タカサゴユリっぽい、葉が細く、花被が紫を帯びるものもあって、勝山さんが言うように、外見からは(1,3)と区別できないこともあるでしょう。せっかく、シンテッポウユリという全体を含むような和名があるのだから、これを使った方が良いと思います。そうすれば、自生の植物と混雑することもあります。

さて、ふたつめのケース、雑種と知りつつタカサゴユリと呼ぶ場合です。

セイヨウタンポポの一部のものは在来タンポポの遺伝子を取り込んでいますが、それでもセイヨウタンポポと呼ばれることがあります。総

苞外片がめくれたり、単為生殖をしたり、かく乱地に生えたりと、セイヨウタンポポと肝心な点が共通だとか、強奪種であることもセイヨウタンポポの特徴だという考え方だと思います。

これと同じように問題の帰化植物が、遺伝的に(1)に近いから(こんなことがあるかどうか知りませんが)とか、共通点が多い(葉幅とか、花被片の色とか、花期とか)ことを重視すべきだからとか、あえて(1)と同じ名前にした方がよい理由があってそうするのでしたらこの帰化植物を「タカサゴユリ」と呼ぶという立場もあると思います。

こういう立場の方がいらしたら、ぜひ「タカサゴユリのすすめ」をお聞きしたいと思います。

すくなくとも花被片中肋の外側が紫色をするからといって、それを「タカサゴユリ」というのはやめた方がいいと思うのですがいかがでしょう。

神奈川・木場英久(2005. 9月10日)

●シンテッポウユリ

素人の「シンテッポウユリのすすめ」への一意見です。

木場さんの

「この帰化植物が増えてきたのは1970年代です。近年になって増えたのは、野生化できるような系統が作られたからではないかと思います。この部分はとても賛成です。きっとそうだと思うことがいくつもありますから。ただ、その原因は単に栽培品からの逸出ではないのではないかと…と私には思えるんですが。というのは、この「タカサゴユリ」は日本以外でも各地で野生化しているようですね。個人的に疑っているのは高速道路脇の整備とともに外国で採取されて吹きつけられた種子に混ざっていたのでは…と

いう気がするのです。というのは私が最初に気づいたのは東名高速道路の法面でしたし。新しい広い道路ができるたびに周辺の法面のイネ科の雑草に混ざって白い花が殖えていった気がします。結実能力も発芽能力も高いので一気に殖えたんでしょうし。きれいだから除草作業でも残されて安定して種子が供給されたんでしょうが。DNA分析等でタカサゴユリ由来の遺伝子とテッポウユリ由来の遺伝子配列が簡単に調べられるのならこのMLの方がたの協力を得て全国各地の個体を集めて調べれば少なくともシンテッポウユリ由来であるかどうかははっきりすると思うんですが。海外のサイトを見ても「タカサゴユリ」にもいろいろあり、葉の広いもの（テッポウユリ型ではないものの）もあったり、中国本土産ということで黄色っぽいものもあったりしてよくわかりません。種子も海外ではいろんな業者が扱って大量に販売しているようですし…。「シンテッポウユリ」でも「タ

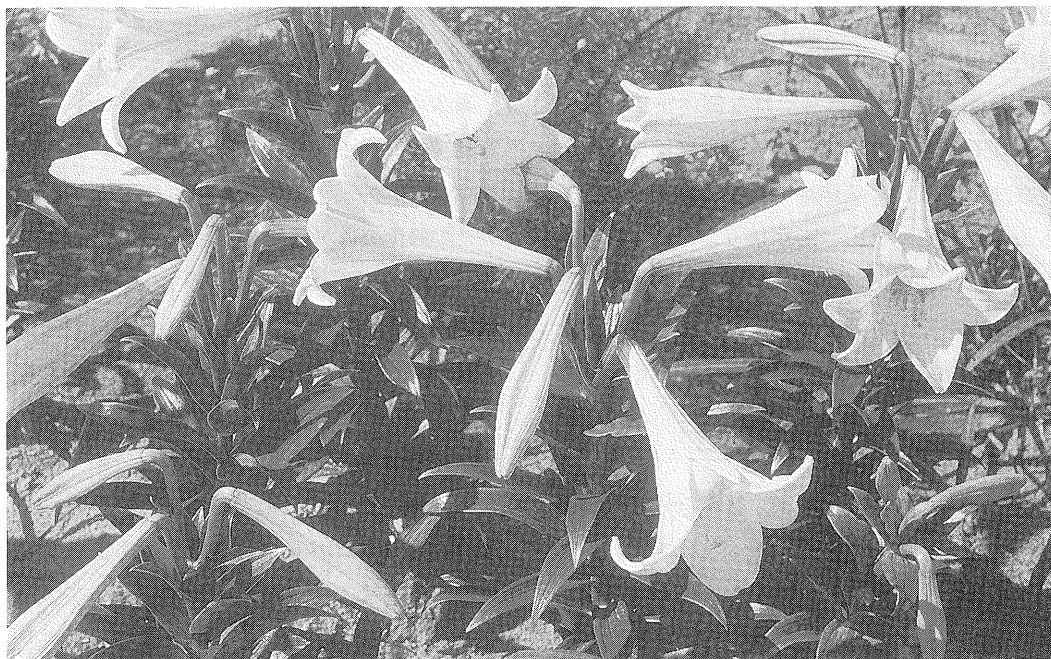
カサゴユリ」でもいいんですが、「シンテッポウユリ」という名はテッポウユリのイメージが強いと思います。「タカサゴユリ」ならそれとはかなり違うものという印象ですし、ほとんどの図鑑の記載と実際の印象が合うんですが。

「総包片が反り返っていればセイヨウタンポポだろう。」といえるような（実際は雑種かもしれないものでも）、一般の人がみて区別できるような明確な視点を是非専門家の方々に示していただけるとありがたいです。博物館等が対応してくださることを期待しています。

愛知・吉川洋行（2005.9月11日）

●シンテッポウユリのすすめ

私も、木場さんがおっしゃるように、「問題の植物」の由来については同意見で、台湾の自生種であるタカサゴユリの末裔ではなく、テッポウユリとタカサゴユリの種間雑種の末裔ではないかと感じています。



▲園芸種のテッポウユリ，花の外側は白く，葉の幅が広い

木場さんの記事を読んで私が感じたこととして、「どこまでを、その植物の名称の範囲としてとらえるのか」ということがあります。テッポウユリとタカサゴユリの種間雑種を、どちらの血をより強く引いているかにこだわらず、広くとらえるというのであれば、「問題の植物」や、一般に市場流通している園芸植物の「シンテッポウユリ」は、いずれもテッポウユリとタカサゴユリの血が入っていることから、学名では種小名の前にXマークがつき、和名では「シンテッポウユリ」という名前となることでよいかと思います。また、多少なりともテッポウユリの血が入っていると思われる「問題の植物」を、台湾の自主種であるタカサゴユリと同一の名称で呼ぶことへの違和感があるのもわかります。

園芸植物は常に人間の一定の関与を前提として成り立っているものです。園芸植物としての「シンテッポウユリ」の場合も、タカサゴユリ



▲園芸種のテッポウユリの幼植物、葉は幅が広い

よりも商品価値の高い、テッポウユリに近い（さらには母種のいずれにもない）特性を目指して品種改良が行われたもので、タカサゴユリに近い特性の個体が出現してもそれは人為的に排除され、品種として出回することはまずなく、私たちの目にするものは木場さんが整理された(1)～(4)のうち、(3)に該当するものばかりとなります。だからこそ、園芸植物としての名前も、新タカサゴユリではなく、新テッポウユリと呼ばれるようになったわけですし、実際、野外で見かける「問題の植物」と園芸植物の「シンテッポウユリ」の各形質の特性については、計測するまでもなく、一見してちがいがあるのがわかります。

以上のように、植物学上の「シンテッポウユリ」と、園芸植物の「シンテッポウユリ」ではとらえている範囲が異なり、後者のほうがより狭い概念であるということかと思います。私が以前投稿した記事で、白い花被の“問題の植物”を「シンテッポウユリ」と呼ぶことに違和感があるとしたのは、まさにこの点なのです。

もうひとつ気にかけておいたほうがよいのではないかと思います。それは、植物の名前というのは、このMLに参加されている専門の方々や、私のような個人的な植物ずきといった、特定の範囲内の人間だけで扱われるものではなく、花きの生産者や市場関係者に使用されたり、店頭やガーデニングなどを通じて一般の目に触れたり、さらに、最近では特定外来生物法の場合のように、個別の生物名が新聞の紙面に掲載されるようになり、一般消費者にも浸透していくものだという事です。

そういった場合、一般の人が「シンテッポウユリ」という名前を聞いた場合に受ける印象と、植物学上の「シンテッポウユリ」という名前が

指すものがあまりに離れていると、一般の人たちに誤解をされるおそれがあるのではないかと、ということがあります。全く仮定の話ですが、「問題の植物」を特定外来生物法で指定となった場合は、どの名前が適当なのでしょう。か。「問題の植物」については、シンテッポウユリとタカサゴユリとも異なる、新称があったほうが、誤解のおそれがないのかもしれません。

東京都・宮本 亮 (2005.9月11日)

●シンテッポウユリのすすめ

大学時代、私は球根類の生理を調べてまして、当時シンテッポウユリのりん片繁殖の実験も手伝っていましたので、宮本さんの認識はよく理解できます。今、盛んに野生化しているものをシンテッポウユリと呼ぶには違和感がありますね。テッポウユリとの雑種起源であっても、外観、種子繁殖力、両面においてタカサゴユリの形質を強く示しており、おそらく、園芸分野の人は今野生化しているものは、何ら抵抗無くタカサゴユリとするかもしれないです。

5年ほど、外観はテッポウユリで夏咲き、花は上を向く栽培系統のシンテッポウユリ、1タイプを作っています。種子もできますが、これは今のところ野生化する兆しは認められないです。

吉川さんの意見「個人的に疑っているのは高速道路網の整備とともに外国で採取されて吹きつけられた種子に混ざっていたのでは…という気がするのです。というのは私が最初に気づいたのは東名高速道路の法面でしたし、新しい広い道路ができるたびに周辺の法面のイネ科の雑草に混ざって白い花が殖えていった気がしています。」についてですが、私はタカサゴユリの実産地からのイネ科牧草の輸入の可能性が低い

こと、今、ひろがっているものがテッポウユリとの雑種起源の可能性が高いとされる点を考慮すると、外国で採取されて吹きつけられた種子に混ざっていたとは考えにくく、栽培品の逸出と考えた方が自然じゃないかと思うのです。

ササユリやヤマユリ、オニユリなど多くのユリ類の生育地を見ていると、むき出しの地面よりも、丈の低い草に覆われている林縁などに生えていることがよくあります。おそらく、タカサゴユリがのり面で大繁殖するのは、ユリの好む環境にあるからではないかと思います。

なお、東名の「タカサゴユリ」については、1983年、神奈川県松井田町の記録があります。

大阪府・植村修二 (2005.9月11日)

●シンテッポウユリのすすめ

わたしは、タカサゴユリのままにしておいてほしいと思います。理由は簡単で、これまで慣れてきた、また、図鑑にも用いられている名前は、誤りでないかぎり、そのまましておく方が余計なエネルギーを使わなくて済むからです。

(要するに年取って新しく覚え直すのは大変だということですね。)

学名は、分類学的な研究が進む中で変更があるのは仕方ない(素人としての言い方ですが…)と思いますが、和名には規約も強制力も無い(先取権的なマナーはあるようですが…)という点を活かして、学名が変わってもその植物と対応する和名は残してほしいものです。

タカサゴユリと称した上で、現在野生しているタカサゴユリには園芸種のシンテッポウユリ(雑種起源)の遺伝子がいろんな割合で混じっているという知見が加わると、知識欲が刺激されて得をしたような気がしませんか?

わたしがタカサゴユリを初めてみたのは26、

7年前、藤沢の以前の住まいの庭でした。ある年、近所中の庭に生えていました。

タカサゴユリという名前が分かるまで数年かかりましたが、その間にあちこちで野生化しているのを見掛け、花被の紫褐色の濃さの程度にはいろいろあることを知りました。近年では、白色に近いものが殖えているなという感触を持っていたところに、今回の話題が出て、疑問が解け、すごくうれしい思いです。

神奈川・松井（2005.9月12日）

●シンテッポウユリのすすめ

花は枯れても、話は盛り上がっているのでも「問題の植物」君も喜んでいることと思います。

吉川さんの「高速道路網の整備」など、あるときに人為が働いて帰化植物が急に増えるというのは、ありそうなことだと思います。「問題の植物」が純粋なタカサゴユリ(3)ではない根拠として、(3)が日本に持ち込まれた時期と、「問題の植物」が広まった時期がずれていることを挙げましたが、根拠のひとつが弱まりました。

吉川さんは、「問題の植物」は雑種由来ではなく、「純粋なタカサゴユリの園芸植物」(3)が逃げ出したものだとお考えなのでしょう。

次は、宮本さんと、植村さんにご返事します。

宮本さんは、「問題の植物」は雑種由来だと考えつつ、「シンテッポウユリ」と呼ぶよりは「タカサゴユリ」と呼ぶのに賛成されているのです。植村さんも同様なお立場だと思います。

雑種のなかからタカサゴユリ的な性質の強いものばかり選抜されて帰化していく、ごく普通に園芸的に「シンテッポウユリ」としているものとは、計測するまでもないほど違いがある。同じ「シンテッポウユリ」という名前で呼ぶに

は違和感がある。…ということですよ。

うちの博物館にはユリの研究家の清水基夫さんのコレクションがあります。清水氏はいろいろなシンテッポウユリの品種の標本を作られていて、その中には「伊那テッポウユリ」のように、葉の細いものもあります。伊那という品種は清水氏の著書にも、シンテッポウユリの一品種として出てくるので、これが(13)ではなく、「園芸的に作られた雑種に由来するもの」(4)であることは間違いないと思います。

標本の葉の幅を計測してみましたら、広いもの(BS鉄砲)は23mmもあり、「問題の植物」とは違ってみえましたが、狭いもの(伊那)は4mmしかありませんでした。ちなみに神奈川県産の「問題の植物」の中には広いものでは7mmぐらいのものまでありました。

また、このシンテッポウユリの標本の中には、花被が紫を帯びるものもありました。



▲タカサゴユリ・シンテッポウユリの果序
果実は上向きになる

つまり、園芸の世界のシンテッポウユリには、現在は広葉のものが多くいのですが、本来はいろいろなものがあり、園芸植物の「シンテッポウユリ」は帰化している「シンテッポウユリ」よりむしろ範囲が広いのではないのでしょうか。

宮本さんの「木場さんのご専門の立場からのご意見を興味深く拝見しました。」にご返事します。専門だなんて…シロウトですよ。神奈川県植物誌ではユリ科も書きましたが、私の専門はイネ科のつもりです。また、野外で(1)や(2)は見たこともありません。私は本や標本や身近な「問題の植物」を見て考えたことを書いているだけなんです。また、松井さんは問題の植物は雑種だと思いつつ、慣れ親しんだ名前で呼びたいので「タカサゴユリ」がよりよいのではないというご意見ですね。

私も学名だけでなく和名も変更は必要最小限に留めるべきだと思います。松井さんの言われるとおり「誤りでない限り、そのままにしておく方が余計なエネルギーを使わなくて済む」と思います。みなさんも同意見だと思います。

今回の場合、台湾に自生する植物(1)を「タカサゴユリ」と呼んでいるわけです。もしも、「問題の植物」を雑種由来であると考えのでしたら、(1)と由来の異なるものを同じ名前と呼ぶのは誤りであり、混乱の原因ではないのでしょうか。

たとえば、宮本さんを例にさせていただくと、「私が植物の写真撮影をはじめた15年ほど前、当時、私が住んでいた小平市（東京都多摩地方東部）ではすでに、公園や空き地にタカサゴユリがけっこうありました。当時撮影した写真を見ると、このあたりのものの花被片は、紫色を帯びたものばかりでした。」というのを読んで、切花として売られていたタカサゴユリ(3)と「問題の植物」を同じ「タカサゴユリ」で呼んでしまうと、これは純粋なタカサゴユリが帰化していた記録が写真に残されているということなのか、いま問題になっている植物のことをいつているのかわかりにくくなってしまいます。正直な話、私はシンテッポウユリで慣れ親しんでいたの、理解するのに読み直してしまいました。

慣れ親しんだ名前でも、いずれ違う名前で呼ぶことになるのだったら、すこしでも早く変更した方が混乱は少なくて済むと思います。

神奈川・木場英久（2005.9月13日）



この誌上討論如何でしたか？ 皆さんは問題のユリをタカサゴユリ、シンテッポウユリどちらの名前で呼んでいますか？ この項の写真のネームは両方を併記しておきました。この「問題の植物」についてご意見をお持ちの方は下記発行所全国農村教育協会宛にご投稿下さい。お待ちしております。

財団法人 日本植物調節剤研究協会
東京都台東区台東1丁目26番6号
電話 (03)3832-4188 (代)
FAX (03)3833-1807
<http://www.japr.or.jp/>

編集人 日本植物調節剤研究協会 会長 小林 仁
発行人 植調編集印刷事務所 広田 伸七

東京都台東区台東1-26-6 全国農村教育協会
発行所 植調編集印刷事務所
電話 (03)3833-1821 (代)
FAX (03)3833-1665
E-mail: hon@zennokyo.co.jp

平成18年11月発行 定価525円(本体500円+消費税25円)

植調第40巻第8号

(送料 270円)

印刷所 新成印刷(株)